氏　　名	田村　美由紀
学位（専攻分野）	博士（学術）
学 位 記 番 号	総研大甲第 2211 号
学位授与の日付	2021年3月 24日
学位授与の要件	文化科学研究科　国際日本研究 学位規則第6条第1項該当
学 位 論 文 題 目	近現代日本文学におけるディスアビリティとジェンダー―身体・性・書くこと―
論 文 審 査 委 員	主　査　　牛村　圭 国際日本研究専攻　教授 坪井　秀人 国際日本研究専攻　教授 伊東　貴之 国際日本研究専攻　教授 飯田　祐子 名古屋大学　大学院人文学研究科 日本文化学講座　教授 内藤　千珠子 大妻女子大学　文学部　教授

（様式３）

博士論文の要旨

氏　　名　田村　美由紀

論文題目　近現代日本文学におけるディスアビリティとジェンダー
――身体・性・書くこと――

全４部９章で構成される本論文は、ディスアビリティとジェンダーという二つの概念を軸とし、両者が交差する場において階層的差異を生み出す力学が複雑化していく様相に目を向ける。とくに「身体」「性」「書くこと」という三つの領域の相関関係に着目し、文学テクストや映画、文化表象の分析を通して、既存の規範的・支配的価値観への対抗的視点を提示することが本論文の目的である。以下、各章の概要を述べる。

第Ⅰ部では、身体の機能的な障害により書くことの困難に直面した書き手、とくに既成の男性作家の経験に焦点を当てる。「第１章　書けない男性作家とアイデンティティの所在――谷崎潤一郎の口述筆記創作をめぐって――」では、谷崎潤一郎の口述筆記創作を事例に取り上げる。書けない男性作家のアイデンティティの所在をめぐって、書く行為を代行した女性筆記者との関係、そしてジェンダーやリテラシーという階層性を生み出す指標がいかに利用されているのかを、谷崎や周囲の人々の証言、批評言説、小説テクストを横断的に分析することで明らかにする。「第２章　口述筆記というケア労働――伊吹和子の事例を中心に――」では、口述筆記をケアの営みとして捉えることを通して、主に女性筆記者の視点から、男性作家との交渉の実態を浮かび上がらせることを試みる。谷崎潤一郎の筆記者を務めた伊吹和子の回想記の記述を導きに、彼女がいかなる論理で口述者（谷崎）と対峙し、また口述筆記の現場に生じる搾取や抑圧に対してどのように抵抗していったのかを検証する。また、口述者と筆記者との関係をケアと依存の論脈に配置することで、アイデンティティの承認をめぐる両者の相互応答性を抽出することを目指す。「第３章　他者とともに書くこと――武田泰淳『目まいのする散歩』――」では、武田泰淳と武田百合子の「異質性」に焦点を当てる。二人は、作家夫婦にしばしば生じる主人と奴隷、あるいは支配と従属の関係とは一線を画す評価を得ており、肯定的な文脈で語られることが多い。本章では、そうした異質さの内実を具体的に解きほぐすため、口述筆記によって執筆された『目まいのする散歩』（1976 年）を対象とした考察をおこなう。このテクストに描出された不如意の身体に対する武田泰淳の意識や他者への敏感なまなざしに着目し、それが「する（能動）／される（受動）」という二項対立を超えて、〈他者とともに書く〉という書く行為の協働性に結びついていることを論じる。

第Ⅱ部では、書く行為の〈主体〉ではなく〈媒体〉となることによって生み出される身

体性の問題を扱う。「第4章　〈媒体（メディア）〉となる身体――円地文子「二世の縁　拾遺」――」では、男性作家たちが口述筆記という枠組みを物語に取り込む際、女性筆記者をいかに造形し、テクストに配置してきたのかを踏まえたうえで、それらとは異なる筆記者の姿を提示した作品として、円地文子「二世の縁　拾遺」（1957年）を取り上げる。本作における口述筆記は、上田秋成「二世の縁」というプレテクストを作中に引用するための単なる手法ではなく、物語における女性主人公の布置とその変化を照射する装置として機能している。筆記者である「私」の〈媒体〉的役割がもたらす身体感覚の変化を物語の展開に沿って分析することで、本作が女性の性に向けられたまなざしを批判的に捉え返したテクストであることを論証する。「第5章　非懐妊のエクリチュール――多和田葉子「無精卵」――」では、文章の創造的な起源になるという意味での書く行為を称揚し、〈書き写す〉ことを創造性を欠く劣った行為とみなす支配的な価値観について再考するため、〈書き写す〉という行為の模倣性や運動性をラディカルに物語化した多和田葉子「無精卵」（1996年）を分析する。本作は書く行為と生殖を、その創造性においてアナロジーに結ぶ思考枠組みに対して問題提起的なテクストである。創造的な主体になることとは異なるやり方で書くことと交わろうとする書き手の姿を通して、創造性に固執することの窮屈さや不自由さ、異性愛規範の排他性をあぶり出す物語の寓意的な構造を読み解く。

第Ⅲ部では、身体と性の領域におけるディスアビリティの問題を扱う。焦点を当てるのは、男性セクシュアリティの規範と亀裂に関わる〈性的不能〉の表象である。「第6章　〈性的不能〉とメランコリックな欲望――谷崎潤一郎「残虐記」――」では、原爆によって〈性的不能〉に陥った男性が登場する谷崎潤一郎の未完の小説「残虐記」（1958年）を分析対象に取り上げる。本作では一見占領下の日本人男性の心性が典型的に表象されているようにみえるが、〈性的不能〉からの回復を志向しない男性主人公のメランコリックな身体に、ジェンダー・アイデンティティの不安定化と異性愛規範が遮ってきた同性への欲望の表出を読み込むことで、〈性的不能〉を意味づける文脈が異性愛主義を前提として構築されていることを明らかにする。「第7章　回帰するトラウマ――新藤兼人『本能』――」で焦点を当てるのは、原爆の後遺症によって〈性的不能〉に陥った男性を描いた新藤兼人監督の映画『本能』（1966年）である。本作は主人公の広島での被爆経験を物語の起点としながらも、1954年に起こったビキニ事件との関連性も示唆されており、核や放射能に対する不安に覆われた時代背景を広く射程におさめている。本章では、これまで性の喪失と回復の道程を描いた物語として評価されてきた本作の解釈を再検討し、被爆体験と男性セクシュアリティの問題が交差する物語構造が、1960年代半ばの時代情勢とどのように切り結んでいるのかについて考察する。

第Ⅳ部では、震災や性暴力といった現代社会においてアクチュアルなテーマを扱った小説テクストの分析を通して、ディスアビリティとジェンダーが交差する場の力学を現代的

な課題として捉えるための糸口を探る。「第 8 章　汚染された身体と抵抗のディスコース――吉村萬壱『ボラード病』――」では、震災後文学のひとつに数えられる吉村萬壱『ボラード病』（2017 年）を取り上げ、病んだ女性の身体に対してどのような意味づけがなされているのかを考察する。人々の生が序列化され、選別される状況と、そうした現実を覆い隠すために理想的な結びつきを装う共同体とのはざまに置かれた語り手の身体描写を手掛かりとしつつ、正常／異常という二項対立の論理を強制する暴力性とそこから脱却する筋道を本作の割り切れない語りから読み取る。「第 9 章　〈傷〉をふさぐ／ひらく想像力――桐野夏生『残虐記』――」では、〈傷〉を抱えた主体と他者との関わりをめぐる問題について桐野夏生『残虐記』（2004 年）を通して考察する。本作の強力な解釈格子として機能してきた想像力という概念について再考し、本作が想像力の有効性を表すと同時に、他者による想像的な所有という不可視の暴力から逃れることの困難さを示すテクストとしても定位しうることを明らかにする。

以上の議論を通し、アイデンティティの内部にはらまれた潜在的な矛盾や齟齬を注視することが、主体の位置を可視化されているカテゴリーだけで即断しないこと、またカテゴリー間の競合の動態から他者との関係性がいかに構築されているのかを検証する視座にも結びつくと結論づけた。

Form8・Separate Sheet
（様式８・別紙１）

Results of the doctoral thesis screening

博士論文審査結果

Name in Full
氏　名　田村 美由紀

Title
論文題目　近現代日本文学におけるディスアビリティとジェンダー—身体・性・書くこと—

近年、社会学や文学、哲学などの分野においてケアやディスアビリティに関する研究が活発化している。戦後日本のディスアビリティとジェンダーが複合する文学作品を中心に考察を行った本論文もそうした新しい研究の潮流を体現したものであり、ディスアビリティ研究とジェンダー研究とを節合（アーティキュレイト）させることで、戦後の時代と現代におけるケアをめぐる諸問題を文学研究の領域で深化させようとする挑戦的な研究である。ディスアビリティとジェンダーという本論文の二つの中心概念は、ともに生物学的身体に密着したインペアメントとセックスを相対化するために導かれている。このことからも明らかなように本論文は作家論的文脈に陥ることなく、構築主義的な分析スタンスを一貫して維持している。

このように本論文のもっとも重要な功績は、ディスアビリティとジェンダーという二つの概念領域を複合的に捉えることによって、文学の創造過程のシステムを再考する根底的な問いかけをもたらしているところにある。上記の両概念をもとに論文の骨格を提示する序章と終章の記述に如実にあらわれているように、本論文がすぐれた成果をあげているのは、文学理論やフェミニズム／ジェンダー批評を主体とする最新の批判理論（クリティカル・セオリー）に学びながら、それを論文全体を統御する自身の理論として血肉化させているからにほかならない。

本論文は計４部全９章で構成されており、前半２部では男性作家が書くという行為に支障が生じそれを代行する他者との関わりに焦点が当てられる。第Ⅰ部では、身体機能の障害がもとで執筆が困難になった書き手、とりわけ男性の作家の創作過程が論じられている。第１章と第２章では書痙のため自身の執筆での創作を断念した谷崎潤一郎の口述筆記とその周辺が取り上げられている。これまでも晩年の谷崎の作品を口述筆記した伊吹和子の証言のことは注目されていたが、「書けない男性作家」たる谷崎の創作（『台所太平記』等）の過程とともに、筆記者伊吹の立場に着目して男性作家と女性筆記者の関係をケアと依存の関係として定位し、そこに筆記者側からの抑圧関係への抵抗を読み取ろうとするこれらの章の考察は、谷崎研究の枠にとどまらない学問的貢献を達成している。一方、脳血栓で手が不自由になり口述筆記を行った武田泰淳と妻で筆記者でもあった武田百合子の関係を分析した第３章でも、筆記者の存在がテクスト内に織り込まれた武田泰淳『目まいのする散歩』を例に、口述／筆記の関係から相互応答的な関係を導き出すという新視点を提示している。夫の死後作家として活躍する武田百合子の再評価にもつながる考察である。

第Ⅱ部では、女性作家の作品を対象に、書記行為の「媒体」の役割を負った女性を作中に表現したテクストの分析を行い、性と身体の表象に着目しながら、女性が書く主体となることの意味を探っている。第４章では円地文子の「二世の縁　拾遺」を論じて、作中でプレテクストの上田秋成『春雨物語』「二世の縁」の現代語訳を書写する女性筆記者が男性口述者から差し向けられる性的ステレオタイプと書記機械（ライティング・マシーン）としての役割を媒介（メディア）（霊媒（メディウム）に

通じる）の立場から裏切る物語として読みかえる。他の男性作家たちとの比較にも目配りして緻密に構築された考察は従来の規範化された読解を退ける水準に達している。第5章では多和田葉子の「無精卵」を取り上げ、作品の根柢にある創作と生殖を寓意的に結びつけるジェンダー規範に対する抵抗の契機を探り出す。意味生成に到達しない自己目的化した書くこと、それを申請者は「非懐妊のエクリチュール」と名づけて、逆説的にその可能性を高く評価する。ここでもバーバラ・スタフォードの身体論などが有効に活用されており、理論的な論の構築においても隙がない。

第Ⅲ部では、ディスアビリティの問題を小説と映画作品を題材として正面から論じている。ここにいうディスアビリティとは、男性の性規範の崩壊、すなわち「性的不能」とその表象に関わる。第6章では谷崎潤一郎の未完作品「残虐記」を占領下の戦後空間の中に再配置し、原爆の被爆で性的不能になった男性主人公のメランコリー的欲望の記述に異性愛中心主義（ヘテロセクシズム）の呪縛を読み取り、そこではクイアな欲望が示唆されつつそこへの通路が塞がれていることを問題化している。第7章は新藤兼人の映画『本能』を対象に、広島での被爆とビキニ事件を背景に見据えながら、1960年代の時代的文脈の中から、男性主人公の身体を日本人の戦争の記憶の加害／被害の両義性を映し出した象徴として捉えるという考察を加えており、この第Ⅲ部では本論文全体が対象とする「戦後」という時代性をどのように意味づけできるかが的確に整理されている。

最後の第Ⅳ部では、21世紀以後の現代小説を取り上げ、そのテクストを本論文が取り組むディスアビリティとジェンダーという二つの主題が複合する場として捉え、東日本大震災や性暴力などの体験を負った女性主体に焦点があてられて、戦後の文学・芸術が問いかけてきた課題を現在形のアクチュアルな課題として総括している。第8章では、大災害の被災地の地方都市を生きる少女を描いた、いわゆる「震災後文学」に属する吉村萬壱『ボラード病』が論じられる。被災地復興の同調圧力の中で孤立しながらそれに抗う少女の姿の中から抽出されるのは、女性の身体が男性の支配をすり抜ける不透明な身体であり、そこにフーコー的な規律的身体への抵抗の契機があると捉えている。第9章では桐野夏生の『残虐記』が取り上げられている。この作品は拉致監禁事件の被害者である小説家の女性が性に深く関わるその経験を自ら語り直し、その語りを彼女の夫で事件の担当検事でもある男性の手紙が縁取る入れ子構造を取っているが、ここではこの特異な物語構造から、両者の想像力の差異とせめぎ合いが批評的に読み取られる。ここでも小説の構造に対する分析が精緻に行われており、一個の現代文学批評としても自立しうる力量がうかがわれる。

以上のように第Ⅰ部から第Ⅳ部までディスアビリティとジェンダーに関わる多様なテーマが論じられているが、執筆に障害を持った男性作家とその補助者、書写する女性を描いた女性作家の作品、男性の性的不能という主題、現代における女性身体と性というように、その配置はバランス良く巧みに行われていることがわかる。各章の連環についても注意深く接続が図られており、論理構成において周到に設計された論文であると見なせよう。加えて一貫して女性における書くこと、性と身体に光が当てられており、文学の現代的課題に対する強い自覚を持ったその批評的射程が終止ゆらぐことがないことは、本論文の大きな魅力である。複雑で難解な内容を論述する際にも文体は明快であり、個々の作品に関する情報提示の方法も適切である。

従来、ディスアビリティやジェンダーに関する議論はマイノリティの権利回復や権力批

判の次元で行われてきたが、本論文はこの二つの概念領域を拡張し、より広範囲に共有可能なものとして開こうとしている。障害学やマイノリティ研究が扱う障害者の枠を拡げることで文学研究にもその理論的成果を吸収しているとも言える。そこにケアという視点を介在させることで、口述筆記などの創作形態を作家中心主義的な問題として捉えるのではなく、筆記者などの補助者(家族を含む)との相互関係や補助者の主体の問題としても捉えられるようになった。ここに本論文の最もめざましい学問的貢献があると評価できる。

ジェンダー研究の文脈においても女性の性や身体に焦点をあてながらも、女性が書くという営みにおいて主従関係や能動／受動関係のような単純な二項対立関係に与さない、より繊細で複雑な様相に光を当てることに成功している。書くことにおける権力や暴力の位相において代用・代行（身体的拡張、ケア）と媒介（触媒）との組み合わせに目配りされていること、女性の立場に局限されがちであったディスアビリティとその表象の問題を男性の側から捉え直す視点もきわめて斬新である。多様な種類の作品が取り上げられているが、論文の構成はバランス良くなされており、論理的一貫性が保たれていること、歴史性に配慮しつつも現代的な課題に対して真摯に取り組んでいることは、上述の通りである。

もちろん本論文にも不足するところがないわけではない。特に前半と後半の間の論脈に質の変化があること、具体的には後半で社会批評の適用という側面が強すぎるのではないかという指摘がなされた。また現代小説を取り上げた第Ⅳ部にはジェンダーやディスアビリティ以外の視点も導入できたのではないかという指摘もあった。さらにはペン（筆）からキイボードに書記形態が変容した時代において書くことのジェンダー意識はどう変わったのかについても考察するとよいという意見もあった。とはいえ、これらは申請者の今後の研究の進展において補訂が十分に可能で、本論文の価値が損なわれるものではない。

以上、総合的に検討した結果、本論文を学位授与にふさわしいものと、審査委員全員一致で判定した。